

## 学校における児童・生徒の非行防止対策の研究(Ⅱ)

— 集団ロールジャッハ・テストと適応性診断テストを用いた非行の予測 —

# 目 次

|   |    |
|---|----|
| はじめに .....                                | 1  |
| I 研究の目的 .....                             | 3  |
| II 研究の構想 .....                            | 3  |
| 1 研究計画と経過の概要 .....                        | 3  |
| (1) 研究計画の概要 .....                         | 3  |
| (2) 第1年次の研究経過の概要 .....                    | 4  |
| 2 この研究の理論的背景 .....                        | 5  |
| (1) 非行に関する基本的な考え方 .....                   | 5  |
| (2) 非行予測の理論 .....                         | 8  |
| (3) 非行予測法の概観 .....                        | 9  |
| 3 研究の方法 .....                             | 10 |
| (1) 調査対象 .....                            | 10 |
| (2) 使用テスト .....                           | 10 |
| (3) 調査の実施 .....                           | 12 |
| (4) テストによる判定結果と実際行動との比較による妥当性の検討 .....    | 13 |
| (5) 他のテストによる予測結果との比較による信頼性の検討 .....       | 13 |
| III 調査の内容と結果の考察 .....                     | 13 |
| 1 テストによる判定結果の概要 .....                     | 13 |
| (1) 集団ロールシャッパ・テストによる判定の結果 .....           | 13 |
| (2) 適応性診断テストによる判定の結果 .....                | 16 |
| 2 自己統制力と環境体験の状態とによる非行の予測 .....            | 19 |
| (1) 非行性識別基準の設定 .....                      | 19 |
| (2) 非行性識別基準による分類 .....                    | 20 |
| (3) 非行性識別基準による非行の予測と実際行動との関連についての考察 ..... | 20 |
| (4) EIPCテストによる非行の予測結果との比較 .....           | 22 |
| (5) 将来に向かっての追跡調査による予測性の検討 .....           | 24 |
| おわりに .....                                | 26 |
| 参考文献 .....                                | 29 |

## は　じ　め　に

青少年の健全な育成を図ることは、世のすべての親の願いであるとともに、国家・社会の重要な使命である。このため、世界のどの国においても次代をになう青少年の健全な育成を目ざして、その総力をこれに結集している。わが国においても、ここ数年来、青少年対策が国家の重要施策の一つとして、とりあげられ、教育、社会福祉、司法、労働等の広い分野にわたって、総合的、多角的な諸種の方策が打ち出され、着々と実施に移されている。

ところで、これらの関係機関の努力にもかかわらず、昭和30年この方、少年非行は年々増加の一途をたどり、質的にもますます、悪質化し、大きな社会問題、教育問題となっている。最近の少年非行のすう勢を昭和39年中に警察に検挙・補導された刑法犯少年（触法行為少年も含む）について概観すると、その数は全国で238,830人を数え、昭和38年の229,717人を9,000人以上も上回り、10才以上20才未満の少年人口1,000人当りの非行率も11.9と、前年の11.3を越え、従来の記録を更新するという好ましくない現象を呈している。しかも、これらの数は警察で正式に取扱った者の数であり、それ以外の統計上の暗数とか潜在非行（Hidden delinquency）などと呼ばれている隠れた非行をも加えたならば、その数は実に膨大なものとなることが予想される。その上、刑法以外の特別法令違反や虞（ぐ）犯、および、その他の不良行為少年の数もみな一様に増加しており、非行をする少年は、その数においても非行率においても、史上最高の記録を示している。

また、これらの少年非行の実態を質的にみると、兇悪化、都市集中化、集団化、低年齢化、上中流家庭の子女の増加、初犯者の増加などをその特徴としてあげることができるが、非行年齢の低下という現象は、必然的に児童・生徒など在校少年による非行の増加となってあらわれてくる。なかでも、中学校・高等学校生徒による非行の増加は著しく、各種の統計の上に明らかにみられるばかりでなく、日常の報道にも世人の耳目を驚かせるような事件が跡を絶たない。このような傾向は教育に携わる者のすべてが、常に大きな関心をもち、真剣にその対策を考えなければならない現象ではなからうか。

これらの児童・生徒の非行の増加やその悪質化が論議されるとき、直ちにその原因を学校教育の不徹底に帰せしめようとする者もあるが、非行の増加と学校教育の問題は一義的に結びつくものではなく、その責任をすべて学校にだけ負わせるのは当惑していない。しかし、児童・生徒ひとりひとりの能力や適性を無視した画一的な教育や過度の進学準備教育、知育偏重の教育、職業教育に対する無理解、一部の学校に見られる弛緩した学校経営や学校の権威の喪失などが、最近における児童・生徒の非行問題の教育的背景として注目しなければならないことを、文部省では「生徒指導の手びき」で指摘している。

このような情勢下にあつて、学校がその教育目標を達成し、児童・生徒ひとりひとりの人格のより正常な、より健康な発達を助成するための重要な機能の一つとして、生徒指導がとりあげられたのである。生徒指導の意義は少年非行の対策という、いわば、消極的な面にのみあるのではなく、児童・生徒の能力、適性、特性、進路などに応じて適切な教育が行なわれるよう、調和のとれた教育課程を編成し、学校の全教育活動を正常かつ活発に運営することによって、児童・生徒が学校や家庭、地域社会の生活に

よりよく適応し、充実した意義ある日々を送ることができるようにするという積極的な面が、より基本的なねらいであることはいうまでもないところである。

しかし、現実的には直接に非行防止を目的とする対策、すなわち、消極的な面の生徒指導としての非行対策を必要とする場合が少なくない。要は積極的な生徒指導と消極的な生徒指導（現実的、直接的な非行対策）とが時と所に応じ、また、その問題に即応して適宜に組合わされて、具体化されるべきであることを「生徒指導の手びき」では強調している。

従来、学校ではややもすると直接的な非行対策は、学校教育のわく外であるとする考え方が根づよく支配し、他の青少年関係の専門機関に依存し過ぎたり、あるいは、学校の体面等にとらわれて秘密のうちに処理してしまうという傾向があったことは、否めない事実である。しかしながら、児童・生徒による非行が急増し、ますます、悪質化しつつある今日においては、もはや、そのような誤った非行観に基づく考え方は許されなくなってしまった。学校でも、もっと積極的な姿勢で非行問題と取り組み、その防止のために真剣に努力を傾注しなければならない段階に追い込まれている。もちろん、直接的な非行対策といっても、それが学校教育としてなされるものであるかぎり、他の青少年関係機関で行なう非行対策とはおのずから異なり、あくまで生徒指導の一環として営まれるものであって、そこには生徒指導としての限界があることはいうまでもないことである。

もしも、児童・生徒に対する非行対策が、学校教育の営みの中において適切に行なわれるならば、他のいかなる青少年関係機関でも、果し得ない大きな効果を期待することが可能であり、少年非行防止に占める学校の役割はきわめて重要となるであろう。非行対策は、いまや、好むと好まざるとにかかわらず、学校教育における緊要な今日的課題として、学校はその解決に対する社会的な責任と使命を負っている。ここに学校における児童・生徒の非行防止対策の研究の意義を見いだすのである。

この研究の究極的なねらいは、学校における直接的な非行対策の効果的な方法の一つとして、非行予測の理論と方法を生徒指導の中に取り入れて、適切な位置づけをしようとするものである。従来、学校において行なわれていた非行対策の多くは、非行が発生してから的事後処理や再発防止対策になりがちであり、非行の危険性を有する児童・生徒に対し、事前に適切な対策を講じて非行の発生を未然に防止するという予防的な営みは、あまり行なわれてはいなかった。その主たる原因の一つとして、ひとりひとりの児童・生徒が非行に陥る危険性を、はたして、有するかどうか、また、その危険性の程度はどうかを予知することが、著しく困難であったことをあげることができるであろう。

児童・生徒の有する潜在的な非行性を予知し、将来の非行を予測することについては、すでに多くの研究者によって試みられ、実験的にはある程度の成果をあげてはいるが、学校で多数の一般の児童・生徒を対象として実施するのに適した非行予測法は見当たらない。本研究では児童・生徒の人格面における自己統制力と環境に対する彼らの認知の状態（環境体験）との2個の因子を客観的テストによって測定し、両因子の相互関連の状態によって、児童・生徒の潜在的な非行性を予知し、非行の危険性を予測する方法の中で、特に専門的な知識・技術を必要とせず、時間的、労力的、経済的な負担も少なく、多忙な学校の教師によって容易に実施することのできる早期予測法について研究し、さらに、その非行予測法を活用した効果的な生徒指導の具体的方法を確立することによって、学校における直接的な非行対策の推進

を図ろうとするものである。

## I 研究の目的 (第2年次)

この研究は「はじめに」において述べたように、学校で利用するのに適した簡易な非行の早期予測法を研究し、その非行予測法を活用した生徒指導の効果的な方法を確立することを目的としている。このために、第1年次においては集団ロールシャッハ・テストと適応性診断テストの2種類の客観的集団テストによって、非行生徒と無非行生徒を識別することの可能性について調査研究したのであるが、その結果、非行生徒と無非行生徒の間には明らかな差が見られ、これら2種類の客観的集団テストによって、両者を識別することは可能であるという肯定的見通しをもつことができた。第2年次においては、はたして、このテストを用いた非行予測法が、多数の一般児童・生徒の中から潜在的な非行性を有する者を識別することができるかどうか、このテストによる非行予測法の実用性(妥当性と信頼性)について、検討することを直接の目的としている。

## II 研究の構想

### 1 研究計画と経過の概要

#### (1) 研究計画の概要

この研究は当教育研究所において、昭和39年度に設定した「子どもの健全育成のための幼児・家庭教育、生活指導、教育相談治療に関する第1次3か年研究計画」に基づいて立案したものであり、生活指導に関する研究分野の中で、最近、大きな社会的、教育的課題となっている児童・生徒の非行防止のための効果的な方法について、次の年次計画によって究明しようとするものである。

第1年次 (昭和39年度) 児童・生徒の非行防止のために、学校で実施するのに適する非行予測の方法として、集団ロールシャッハ・テストと適応性診断テストの2種の客観的集団テストを用い、児童・生徒の潜在的な非行性を識別することが可能であるかどうかについて、非行生徒群と無非行生徒群の自己統制力と環境体験の状態を前記のテストによって調査測定し、両群の差から非行の危険性を予測することについて研究する。

第2年次 (昭和40年度) 第1年次の研究による非行予測法の実用性について調査するために、次の事項について検討する。

- ① テストのめくら分析(Blind analysis)による判定結果と調査対象者の実際行動との関連性の考察
- ② このテストによる予測結果と他のテストの予測結果の比較考察
- ③ このテストによる予測結果と、調査対象者の行動の追跡による調査結果との関連性の考察

第3年次（昭和41年度） 児童・生徒の潜在的非行性の形成過程の分析と、非行予測法を活用した非行防止のための生徒指導の具体的方法について研究する。

## (2) 第1年次の研究経過の概要

### ① 研究の目的と仮説の設定

客観的集団テストを用いて非行者と無非行者を識別し、非行を予測する方法を研究するために、次の仮説を設定した。

仮説Ⅰ 人間の行動を統制し、社会の行為基準に適合させる機能をもつ自己統制力は、非行の発生に対し抑制的に作用する。したがって、非行者と無非行者の自己統制力の状態を比較するならば、両者の間に明らかな差がみられるであろう。

仮説Ⅱ 人間の行動の様態は、環境に対する認知の状態（環境体験）によって異なる。したがって、非行者と無非行者の環境体験の状態を比較するならば、両者の間に明らかな差がみられるであろう。

### ② 研究対象の選定

新潟市内の中学校の中から、地域性を考慮して4校を研究対象校として選び、その4校の生徒の中から、非行生徒60名とその対照群として無非行生徒60名を選定した。

### ③ 調査の実施とその結果

仮説Ⅰ、Ⅱを検討するために、昭和39年9月非行生徒、無非行生徒各60名に対し、集団ロールシャッハ・テストおよび、適応性診断テストを実施し、両群の自己統制力と環境体験の状態を調査し、比較検討した。その結果は、非行群と無非行群の間に明らかに統計上の有意差が認められ、仮説Ⅰ、Ⅱは採択された。この仮説の採択によって、自己統制力と環境体験の状態とを調査測定することにより、非行を予測することは可能となった。

### ④ 自己統制力と環境体験の状態による非行の予測

自己統制力と環境体験の二つの因子と非行の有無との関係は次表のようになる。

自己統制力・環境体験の状態と非行の有無との関係

数字は人数（ ）内は%

| 自己統制力と<br>環境体験<br>群 別 | 自己統制力良好<br>環境体験 良好 | 自己統制力良好<br>環境体験 不良 | 自己統制力不良<br>環境体験 良好 | 自己統制力不良<br>環境体験 不良 | 計           |
|-----------------------|--------------------|--------------------|--------------------|--------------------|-------------|
| 非 行 群                 | (a) 2<br>(3.3)     | (c) 6<br>(10.0)    | (e) 13<br>(21.7)   | (g) 39<br>(65.0)   | 60<br>(100) |
| 無 非 行 群               | (b) 21<br>(35.0)   | (d) 22<br>(36.7)   | (f) 8<br>(13.3)    | (h) 9<br>(15.0)    | 60<br>(100) |
| 計                     | 23                 | 28                 | 21                 | 48                 | 120         |

$$\chi^2_0 = 44.76 \quad P < 0.01 \quad df = 3$$

- a 良い自己統制力を持ち、良い環境体験の状態にある者（良統制・良体験群という）は、非行群にあってはわずかに2名（a）で全非行生徒の3.3%にすぎないが、無非行群にあっては21名（b）で全無非行生徒の35.0%に及んでいる。次にこれを良統制・良体験群の総数23名（a+b）に対する割合について比較してみると、非行生徒は2名8.7%であるのに対し、無非行生徒は21名91.3%

％となっている。この分布についての $\chi^2$ （カイ自乗）検定の結果、危険率0.01以下で有意差があった。このことから、良い自己統制力を持ち良い環境体験の状態にある者は、非行をする危険性が少ないといえるであろう。

b 不良な自己統制力を持ち、不良な環境体験の状態にある者（不良統制・不良体験群という）は、非行群では39名（g）で全非行生徒の65.0％に及んでいるのに対し、無非行群ではわずかに9名（h）で全無非行生徒の15.0％にすぎない。これを不良統制・不良体験群の総数48名（g+h）に対する割合について比較してみると、非行生徒は39名81.3％であるのに対し、無非行生徒はわずかに9名18.7％である。この分布について $\chi^2$ 検定の結果、危険率0.01以下で有意差があった。このことから、不良な自己統制力を持ち、不良な環境体験の状態にある者は、非行に陥る危険性が高いといえるであろう。

c 良い自己統制力を持ち、不良な環境体験の状態にある者（良統制・不良体験群という）は、非行群では6名（c）で全非行生徒の10.0％であり、無非行群では22名（d）で全無非行生徒の36.7％である。これを良統制・不良体験群の総数28名（c+d）に対する割合について比較してみると、非行生徒は6名21.4％であるのに対し、無非行生徒は22名78.6％である。この分布について $\chi^2$ 検定の結果、危険率0.01以下で有意差があった。このことから、自己統制力が良好な場合は、不良な環境体験の状態にあっても、非行は発生しにくいといえるのではなかろうか。

d 不良な自己統制力を持ち、良い環境体験の状態にある者（不良統制・良体験群という）は、非行群では13名（e）で全非行生徒の21.7％であり、無非行群では8名（f）で全無非行生徒の13.3％である。これを不良統制・良体験群の総数21名（e+f）に対する割合について比較してみると、非行生徒は13名61.9％であるのに対し、無非行生徒は8名38.1％である。この分布について $\chi^2$ 検定の結果、有意差は認められなかったため、不良な自己統制力をもって、良い環境体験の状態にある者の非行の発生については、断定的なことはいえない。

以上の調査とその結果の分析により「良い自己統制力を持ち、良い環境体験の状態にある者は、非行に陥る危険性は少なく（非行に陥るチャンス100につき8.7）、反対に自己統制力が不良で、その上、不良な環境体験の状態にある者は非行に陥る危険性が高い（非行に陥るチャンス100につき81.3）。」ということを実証的に知ることができた。このことは、児童・生徒の有する非行の危険性（潜在的非行性）は、児童・生徒の自己統制力と環境体験の状態を調査測定することにより、予知することも可能であることを示しているものと考えてもよいであろう。

## 2 この研究の理論的背景（非行および非行予測についての理論）

非行や非行予測については多くの学説や立場があり、それぞれの立場において研究が進められている。したがって、その研究の理論的根拠や立場が明らかでなければ、研究の内容について理解することは困難であろう。そこで、次にこの研究の理論的背景として非行、および、非行予測に関する基本的な考え方について述べてみたい。

### (1) 非行に関する基本的な考え方

#### ① 非行の定義



非行とはデリンクェンシー (Delinquency) の訳語であるが、これについての定義は固まっていない。しかし、一般に社会における秩序や一定の行為基準に反する行動を意味し、犯罪よりも広い概念として用いるのが普通である。グリェック夫妻 (Glueck, S. & E.) は、非行の定義についてその著「少年非行の解明」に「すべての非行行動は、どのような特定の形態をとろうとも、社会規律の要求に対する個人の不順応という公分母をもつものであり…… 成人社会の複雑した基準に対する不適応の一形態である。」と述べているが、非行も人間の行動の一形態であって、自我 — 環境体制の力動的な表現としてみることができる。人間の行動のうち、多くの普通人の行動から著しく逸脱した行動は異常行動、または、不適応行動などといわれているが、これらの異常行動は、その異常性の方向が外界に指向するか、自己自身の内界に指向するかによって、反社会的行動と非社会的行動とに分けられる。

反社会的行動のうち社会のもっている価値基準、すなわち、法律、規則、道徳、習慣などに適応することができないで、健全な社会にとって有害な行動となり、現行の少年法の規定に触れるような行動—— 犯罪行為 (14才以上で刑法やその他の法令に違反する行為)、触法行為 (14才未満で刑法やその他の法令に違反する行為)、ぐ犯行為 (将来、刑法やその他の法令に違反するおそれのある凶器所持、けんか、不純異性交友などの行為) —— や、その他の不良行為などを総称して、今日では一般に非行といいならわしている。

本研究では一般の慣習に従って、このような広い意味に用い、学校や家庭で教師や保護者が手をやくような反社会的な行動のすべてを、非行の概念に含めて考えている。そして、その程度については次のように3段階に区分して用いている。

- 重度の非行…………… 犯罪行為や触法行為のあるもの
- 中度の非行…………… ぐ犯行為のあるもの
- 軽度の非行…………… その他の不良行為などがあるもの

## ② 非行の原因

非行の原因については多くの研究とそれに基づく、いろいろの学説があるが、今のところ、これといった定説はみられない。少年非行が制度的に成人犯罪から区別して取り扱われるようになったのは、ようやく今世紀初頭からであるが、それ以前から少年も含めて犯罪の原因を科学的に究明しようとする努力が、それぞれの立場で続けられており、古くから非行の原因を遺伝的素質に求めようとする「生得説」と、環境的条件に帰せしめようとする「獲得説」とにわかれて鋭く対立している。

生得説とは素質論であり、非行の主観的、内面的要因に注目して遺伝、性格、体質、精神異常など個人の内的条件にその原因を求めようとするもので、人類遺伝学、体質生物学、性格学、精神医学などの知見を集成して、犯罪生物学としての学問領域をうちたてている。獲得説とは環境論であって、非行の客観的、外面的要因に着目して気候風土、地域、宗教、経済、教育、文化などの外的条件に原因を求めその病理性と非行との関係を明らかにしようとするもので、その学問領域は犯罪社会学である。

やがて、これらの関係諸科学の進歩と相互の歩みよりによって、素質的要因と環境的要因との相互作用のなかかわり合いのなかで、非行性の形成や非行行動の発生を多面的、かつ、発達の的に理解しようとする統合的な試みが現われてきた。ウィリアム・シュテルン (Stern, W.) の輻輳 (ふくそう) 説と呼ばれるものがそれである。この学説では人間の行動やその発達を「遺伝的素質」と「環境の影響」との



二つの要因の相互関係においてとらえようとするもので、「総合的動力的犯罪論」ともいわれている。この立場では、非行は人格全体を貫いて作用する素質的要因と環境的要因の力動的関係によって、発生すると考えるものであるが、おそらく、この考え方を否定するものは少ないであろう。本研究においてもこの立場に立って、個人の人格とその個人がおかれている環境との相互作用的なかわり合いの中に、非行の原因を求めていきたいと考えている。

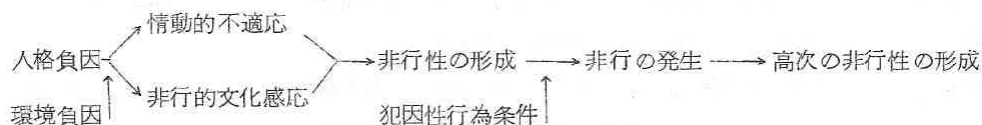
### ③ 潜在的な非行性の形成と非行発生の心理的機制

潜在的な非行性とは、個人の人格のうちに潜む環境との関係における恒常的な反社会的異常状態 — 非行への準備状態をいい、非行危険性 (Potential delinquency) とか、前非行性 (Pre-delinquency) などともいわれている。潜在的な非行性の形成について、水島恵一氏はその著「非行臨床心理学」に次の二つの機制をあげている。

- a 欲求不満状態の反応とみられる一次性行動異常や、愛情、しつけなどの不足が行動の社会的統制を弱める結果、本来の欲求傾向が非行的に条件づけられるなど、適応能力の阻害に関する情動的不適応の機制
- b 反社会的集団への所属や非行的文化への接触によって、反社会的な準拠わく (Frame of reference) や役割意識などが固定し、規範性の障害 (非行観念の取り入れ) が人格の側に条件づけられ、反社会的な態度が形成される非行的文化感応の機制

この二機制は基底的な人格負因と相まって、相互作用をしながら反社会的に固定し、より高次の非行性へと発展していくものである。

このようにして、人格の奥深く、ひそかに形成された潜在的な非行性は、非行への準備状態であって、そこへ非行を現実には引き起こすための引き金の役目をする犯因性行為条件 (非行を誘発する特定の社会的場面) としての刺激が加えられた時、非行は現実の行動となって現われるものであるという。児童・生徒のもっている潜在的な非行性が強ければ強いほど、わずかの犯因性行為条件によって、容易に非行が顕在化し、その反対の場合には非行の発生が少ないことは、今日、多くの少年非行研究者によって認められているところである。この関係を水島氏の所論を基礎として図示すれば、次のようになるであろう。



このような心理的機制によって発生した非行について、これを現象的に類別化すれば、次の四つの類型に大別することができる。

- ア 根本的に性格偏倚 (い) をきたしているもの
- イ 欲求不満や葛藤 (かっとう) による情動障害の強いもの
- ウ 非行的文化や集団の影響の著しいもの
- エ 本人自身における非行習性や不良目的性の著しいもの

多くの場合、非行はそれが単一の類型として現われることは少なく、四つの類型の組合わせとして見

いであるが、特に前2種類の著しい場合は人格性の非行とし、後の2種類の強い場合には環境性の非行として理解することもできるであろう。

## (2) 非行予測の理論

### ① 非行予測の可能性

人間の複雑な精神活動の所産である非行という社会的現象を、科学的に予測するということは、はたして、可能であろうか。今日、社会現象における原因と結果との関係を厳密に明らかにすることは、きわめてむずかしいといわれている。しかし、われわれは、日常生活における人間の行動について、多くの予測を行なっている。この場合には多分に従来の経験や直感などにもとづく、思弁的、直観的な方法によっているものであるが、人間の行動は、レビン (Lewin, K.) の  $B = f(P \cdot E)$  という公式であらわされるように、人間の行動  $B$  はその人の人格  $P$  と、その人を取りまく環境  $E$  とによってきまるものであるから、その人の人格と環境との状態を知ることによって、その人がどのような行動をするかを予測することは不可能ではない。この行動の予測について、館沢徳弘氏はその著「少年非行の予測」に、次のように述べている。“人間の行動を理解するためには、行動の基礎をなす人格と環境とが理解されなければならない。人間の行動は多様なものであり、食事、仕事、遊戯、就寝など数限りない社会的行動がある。これらの行動をする場合、それぞれの行動についての心理的な場において、因子の布置がなされる。レビンの場の理論によると、心理的な場とは行為者に認識される場であって、それはとりもなおさず、本人の生活領域である。それを生活空間 (LSP) というならば、 $B = f(LSP)$  として表わすことができる。  $B$  は  $LSP$  の関数であり、 $LSP$  の一定の因子の布置の状態が一定の  $B$  を決定するのである。逆に一定の  $B$  が生起するには、心理的場に一定の因子の布置がみられる。したがって、食事、歩行、読書などの場合には、因子の布置の様態も類型化するものと考えられる。これは特定の個人の行動だけでなく、多数の人間の行動にも共通の因子の布置がみられるもので、類型的な心理的場における因子の布置から、多数人の類型的行動が生起することが考えられる。もしも、類型的な心理的場における因子の布置を知ることができるならば、多数人についての類型的行動をあらかじめ知りうるのである。これが行動の予測である。しかし、生活空間は客観的空間ではなく、行為者の認識した主観的空間である。行為者の主観的空間は厳密に言えば、各人各様であって多数人について一様に知り得ないものであるが、客観的空間の因子の布置の状態で、あるいは、主観的空間を何らかの形で客観化した因子で、行為者の将来の行動を類型的に予測することは可能である。”

以上のような館沢氏の所論によって、人間の行動の一つである非行についても、個人の主観的空間の因子の布置を何らかの形で客観的には握ることができれば、予測することは可能であると考えている。

### ② 潜在的な非行性と非行の予測

潜在的な非行性を有する者は、犯因性行為条件としての刺激によって、容易に非行に走りやすい。その非行がどのような類型に属するものであっても、このことには変わりはない。潜在的な非行性の状態は、具体的には人格面における自己統制力 (欲求不満耐性) と社会的環境面における環境体験 (環境に対する認知のし方) の良否としてみることができる。

#### a 自己統制力と非行との関係

ヒーリー (Healy, W.) によれば、欲求不満や葛藤 (かっとう) などによる心理的緊張が、個人の有

する耐性の限界を越えた時、その代償として非行が現われるという。このような耐性のことを自己統制力ともいい、遺伝的、素質的なものと環境、教育、経験などによって後天的に得られたものとが、複雑にからみ合って形成されたものであって、いろいろな欲求不満や誘惑などに耐え、自己の行動を社会の行為基準に適合させ、社会的に容認される行動を選択させるなど、個人と環境との調整的な機能をもっている。したがって、貧困な自己統制力は結果として、容易に衝動的な行動をひき起こし、社会の行為基準から逸脱することになりやすい。これに反し、すぐれた自己統制力は欲求不満や誘惑などの刺激にもよく耐えて、非行などの反社会的行動の発生を抑制する。

#### b 環境体験と非行との関係

人は不良な環境におかれれば、非行に陥りやすいと一般的にいわれている。しかし、同じ環境にありながら非行に陥る者と陥らない者がある。この違いは単に自己統制力の差だけではなく、自己のおかれている環境をどのように感じとり、どのように認知しているかという環境体験の状態と密接に関連しているのである。環境体験の状態は環境とのかかわりにおける自己自身をどのようにみるかという、自我認識の構造にかかっている。人の社会的場面での行動を予見するためには、その人の自我認識の構造を明らかにしなければならない。

もしも、自己のおかれている環境に対し、良い環境体験として認識している場合には、外面的には、それが、どのように不良な境遇であったとしても、精神的には安定した良い適応の状態を示し、不適応行動としての非行は発生しにくい。その逆に不良な環境体験として認識している場合には、たとえ、それがどのように良い境遇であっても、常に不満状態におかれて精神的な緊張がたかまり、不適応行動としての非行の発生に促進的に作用する。同じ環境にあっても、その環境をどのように認知しているかという環境体験の状態によって、非行への衝動は大きく違ってくるのである。

以上は自己統制力（欲求不満耐性）と環境体験（環境に対する認知のし方）の良否が、非行という現実の行動の発生とどのような因果関係にあるかについて述べたのであるが、人格の面において自己統制力が劣り、その上、不良な環境体験の状態にある者は、そうでない者に比べて、非行の危険性の高い不安定な状態におかれている。したがって、児童・生徒の自己統制力と環境体験の状態という二つの因子の布置を、客観的に測定することができれば、その者の非行への危険性の度合い、すなわち、非行の準備状態の程度を判断することができ、将来の非行の予測も可能となるのである。このような考えによって、本研究では児童・生徒の潜在的非行性を、自己統制力と環境体験という2個の因子によって具体的に測定し、それによって将来の非行を予測しようとするものである。

#### (3) 非行予測法の概観

少年非行の激増、なかでも在学児童・生徒の非行の増加に対する効果的な直接対策として、最も期待されているのが、早期発見・早期治療であるが、これはカウンセリングとならんで教育界における非行防止のための二つの大きなテーマになっている。最近、早期発見・早期治療の具体的な方法として、非行予測法の活用が教育界においても注目されるようになってきた。

非行性形成の原因を知り、将来の非行を予測するということは、非行者を教育的、あるいは、治療的

な立場で処遇して、非行の発生やその発展を防止しようと考えている人々にとっては、医師の診断における予後の見立てと同じように、欠くことのできない重要な過程である。このために、児童・生徒の有する潜在的な非行性を早期に発見し、彼らの将来の社会的行動、特に、非行の危険性について確実な予測をしようとする研究が、洋の東西を問わず、早くから試みられていたが、1920年から30年代にかけて、ようやく活発になってきた。

1950年にグリュック夫妻が、「少年非行の予測」についての画期的な研究を発表するに及んで、グリュック方式による予測研究がとみに盛んになり、わが国においても大きく取りあげられるようになってきた。特に昭和33年に発生した小松川事件（18才の定時制高校生の朝鮮人が、小松川高校の屋上で女子高校生を殺害した事件）の後、当時の法務省・安倍治夫検事が「この少年はグリュックの非行予測方式によって予測すれば、非行性が非常に高く、大きな事件をひき起こす危険性は事前に知ることができたはずだ。」と発表してから、司法部内に大論争を巻き起こし、少年非行の激増という社会情勢に刺激されて、教育、社会福祉、司法等の青少年関係機関や専門家の注目をあつめ、各種の非行予測法が発表され、いまや、少年非行研究は非行予測法の発表時代にはいったとさえいわれている。教育界においても、この問題は真剣に考えられ、不断の研究が続けられているが、やがて、非行予測は学校における非行対策の中で、大きなウェイトを占めるにいたるであろう。

## ① 非行予測法の分類

### a 方法による分類

非行予測法には方法論的に、二つの大きな流れがある。その一つは全体的評価法ともいわれている臨床診断的な方法であり、他の一つは点数法ともいわれている数理統計的な方法である。臨床診断的な方法とは、犯罪生物学、および、犯罪社会学的な立場から、あらゆる近接諸科学の知見を動員して、予測対象者の人格は、もちろん、それをとりまく社会環境を縦断的に、あるいは、横断的に分析・総合し、力動的な全体的評価によって非行性の程度を判断し、将来の非行を診断的に予測しようとするものであって、非行を現実を起こすかどうかは、個々の対象のダイナミックスにあるとする立場をとっている。この立場の非行予測法では、診断のための最も重要な指標を対象者の人格、特に性格に求め、これと関連して過去の社会的行動と、そのおかれている環境とを把握し、それらの力動的な相互関係の考察から予後を知ろうとするもので、高度の専門的知識や技術が要求され、資料収集のために大きな時間と労力を必要とするものである。

これに対し、数理統計的な方法では非行と密接な関連のある諸因子（犯因的諸特性）を、統計的方法によって数量化し、その得点の大小によって、将来の非行の有無を蓋然的に予知しようとするもので、確率論にその根拠をおくものである。この方法の特徴は、臨床診断的な項目や主観的判断を必要とする項目をさけ、だれでも利用できる客観的な、そして、非行者と無非行者とを鋭く識別できる条件を満たす項目、すなわち、両者の間に統計的に大きな有意差のある項目の評定によって、将来の非行を予測しようとするものであるが、予測因子とその評定法を厳密に規定しておくならば、異なる評定者によっても同一の予測結果が期待できるので、前者に比べ、より客観的であるといわれている。

### b 目的による分類

非行予測法は、その目的によって早期予測法と再非行予測法とに分けることができる。早期予測法とは非行が現実には発生しないうちに、将来の非行の危険性を予知しようとするものであり、再非行予測法とはすでに非行のあった者が、将来、再び非行をするかどうかを判断しようとするものである。

## ② 学校で用いるのに適した非行予測法の条件

学校で行なう非行予測の第一の目的は、数多くの一般の児童・生徒の中からできるだけ早期に、一表面的、外見的な態度や行動には何らの異状が認められないうちに、潜在的な非行性を有する者を選び出すことにある。このためには、早期予測法によらなければならないことは当然であろう。また、方法的には非行者に対する臨床経験の少ない、多忙な一般の教師によって行なわれるのを原則とするので、専門的知識や技術を要する方法では、それがどのように予測精度の高いものであったとしても、実用性は少ない。学校で実施するのに適した非行予測法は、次の諸条件を満たすような、数理統計的手法による早期予測法であろうと考える。

- 客観的な評価尺度があって、異なる評価者によっても同一の予測結果が期待できること
- 調査や結果の整理に要する時間や労力、および、経済的負担が少ないこと
- 低年齢時に集団的に実施できること

## 3 研究の方法 (第2年次)

### (1) 調査対象

新潟市内の工場地帯で非行多発地域にあるA中学校の2年生383名(男209名、女174名)を調査対象として選んだ。この数は同校2年生11個学級475名の生徒の中から、この研究に必要とする被験者数400名になるように、学級番号順に9個学級を調査対象学級としたものであるが、実際には、テスト当日の欠席やテスト実施後の転校等により、調査不能となった者を除いたので、最終的な調査対象数は全調査を完了した383名となったのである。

### (2) 使用テスト

第1年次の調査と同じく、人格面における自己統制力の状態を調査するためには、集団ロールシャッハ・テスト(本明 寛著 集団新訂人格検査 金子書房)を用い、社会的な環境面における環境体験の状態を調査するためには、適応性診断テスト(長島貞夫 他2名共著 金子書房)の社会適応の5項目を用いた。以上の両テストについては、昭和39年度研究紀要 第50集に説明してあるので省略するが、このほかに本年度は比較研究のために、新たにEIPCテスト(島村輝雄著 青山書店)を使用した。

EIPCとは、手びき書によれば、The Estimative Inventory for the Problem Childの略で、問題生徒予測テストという意味であり、主として児童・生徒の自己内省によって、138項目の質問に対する回答を求め、その集計整理の結果から一般の児童・生徒の、パーソナリティの傾向と適応の状態とを知り、いろいろな問題をもつ児童・生徒の型を予測して、問題が表面化する前に予防するのがこのテストの目的である。

このテストでどのようなことがわかるかについては、手びき書で次のように述べている。

- 問題に対する抵抗力が大きいのか、小さいのか。

- すでに問題をもっているか。もっているとしたら、どんな点に問題があるか。
  - 問題をもっている場合、それを内に押える傾向をもつか、外に現わす傾向をもつか。
- 以上を総合して、次のように判定する。

〔Ⅰ〕ノイローゼ傾向型（N型）

問題を内に押えて悩み、逃避的な問題行動に走る可能性のあるもの

〔Ⅱ〕非行傾向型（D型）

問題を表面に出してきて、感染源が近くにあると、非行に走る可能性のあるもの

〔Ⅲ〕部分問題型（P型）

N型でもD型でもないが、部分的に問題をもっているもの

〔Ⅳ〕適応型（A型）

問題がなく、適応しているもの

### (3) 調査の実施

#### ① テストの実施と結果の整理

昭和40年9月、調査者がA中学校に出向いて、各学級ごとに集団ロールシャッハ・テストと適応性診断テストを実施し、全調査を終了した383名分を整理して、この研究の資料とした。EIPCテストについては、昭和40年6月、A中学校が独自の立場で実施したものであるが、その中からこの研究の調査対象に該当している375名（男205名、女170名）のテスト結果を利用させてもらった。

#### ② 調査対象者の実際行動の調査

383名の調査対象者全員に対し、実際の非行の有無とその程度とを、先に述べた非行程度の分類区分に従って、次のような具体的基準を設けて調査した。

○ 重度の非行がある。

犯罪行為や触法行為によって、すでに警察等の補導を受けたことがあるか、あるいは、まだ警察等の補導は受けてはいないが、明らかな犯罪行為や触法行為のあるもの

○ 中度の非行がある。

犯罪行為や触法行為は認められないが、しばしば、ぐ犯行為やその他の不良行為があり、犯因性行為条件としての誘因の状況によって、容易に犯罪行為や触法行為に発展する危険性があると考えられるもの

○ 軽度の非行がある。

時に軽いぐ犯行為やその他の不良行為などの反社会的行動があり、また、教師や保護者に対する態度が不良で取扱いに困るもの

調査にあたっては、学級担任教師が主たる評定者となって、自らの日常の観察や他の教師、保護者、補導関係者などからの情報、および、指導要録や行動観察簿などの諸記録、ならびに、諸調査の資料等に基づいて評定したが、評定者の主観や偏見、好悪の感情などによって、評定結果がゆがめられることのないように、調査者が各学級担任教師に個々に面接して、その説明をきき、資料を検討するなどして、できる限り客観性の保持につとめた。



#### (4) テストによる判定結果と実際行動との比較による妥当性の検討

この研究によるテスト法が実際に非行性を有する者を、どのような確率で識別しているかを次の一つの方法によって調査し、非行性保有者識別の妥当性を検討した。

- ① 集団ロールシャッハ・テストと適応性診断テストによる判定結果と、現在までの実際の非行との関連性を調査し、非行生徒に対する識別力を検討する。

— 外部的基準による妥当性の検定      回顧的検定法 —

- ② 将来に向けて生徒の行動を追跡調査し、予測の適中率を調査する。

— 外部的基準による予測的妥当性の検定      展望的検定法 —

#### (5) 他のテストによる予測結果との比較による信頼性の検討

非行予測の専門的テストとして、10か年の長期にわたる研究と2,875名の被験者を用いて標準化したといわれるEIPCテストによる予測結果との比較により、本テスト法の信頼性を検討する。

### Ⅲ 調査の内容と結果の考察

#### 1 テストによる判定結果の概要

##### (1) 集団ロールシャッハ・テストによる判定の結果

###### ① このテストの判定基準の設定

集団新訂人格検査によって、調査対象者の自己統制力（自我の統制機能）を「不良」，「やや不良」，「やや良好」，「良好」の4段階に区分して判定した。この4段階の判定基準は、このテストの手びき書による簡易診断法を主軸とし、それにロールシャッハ・テストの診断法、および、前年度の調査結果などを参考として、次のように設定したものである。

- 不良    自我の統制機能に問題があって、欲求不満耐性が弱く、わずかの欲求不満や葛藤（かつとう）によって、精神的緊張がたかまり、情動障害による不適応が生じやすい状態をいい、具体的には集団新訂人格検査の簡易診断項目10個（F, L, —, F, L, 平均値, key —, P., FM, CF + C, F, FC' + C'F + C' + C<sub>sym</sub>, KF + K, cF + c）のうち4個以上がチェックされたものをいう。
- やや不良    不良に準ずる程度のものをいい、具体的には簡易診断項目10個のうち3個がチェックされたものをいう。
- 良好    自我の統制機能が正常で欲求不満によく耐えて、みだりに情動障害による不適応が生じにくい状態をいい、具体的には簡易診断項目のチェックが1個以内であって、しかも、key — の出現が2以内のものをいう。
- やや良好    良好に準ずる程度のものをいい、具体的には簡易診断項目のチェックが2個のもの、および、簡易診断項目のチェックが1個以内であってkey — の出現が3以上のものをいう。

###### ② テストの判定基準によって分類した自己統制力の一般的傾向



第1表

自己統制力の一般的傾向

(実数)

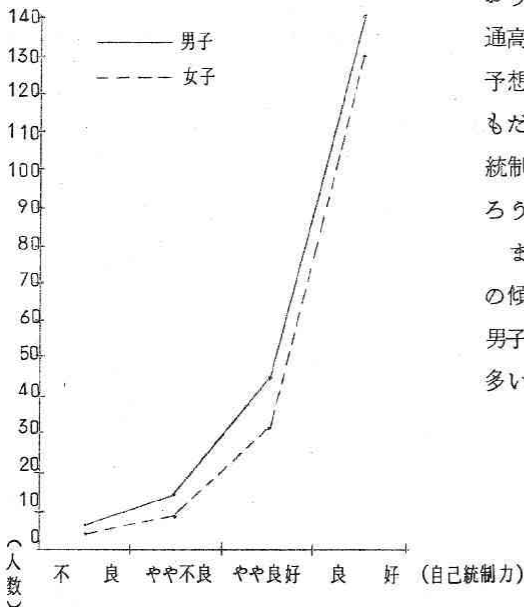
| 自己統制力の状態<br>性別 | 不 良 | やや不良 | やや良好 | 良 好  | 計   |
|----------------|-----|------|------|------|-----|
| 男              | 6   | 16   | 47   | 140  | 209 |
| 女              | 3   | 9    | 32   | 130  | 174 |
| 計              | 9   | 25   | 79   | 270  | 383 |
| 比率 %           | 2.4 | 6.5  | 20.6 | 70.5 | 100 |

$$\chi^2 = 11.49 \quad P < 0.01 \quad df = 3$$

調査対象者383名について、自己統制力の一般的傾向を男女別にみると、第1表のような分布になる。これをグラフで表わすと第1図のようなJ字型の度数分布曲線をえがく。第1表の分布について、 $\chi^2$  検定の結果、危険率0.01以下で統計的有意差が認められた。

男女合計270名(70.5%)は自己統制力が良好であり、79名(20.6%)はやや良好であった。良好とやや良好を合わせると349名(91.1%)の者の自己統制力には問題性がみられず、自我の統制機能は正常であると考えてよい。25名(6.5%)は自己統制力がやや不良であり、9名(2.4%)は不良であった。やや不良と不良を合わせると34名(8.9%)は自己統制力に何らかの問題性が認められ、自我の統制機能に正常性を欠いている。

第1図 自己統制力の状態



この調査の結果は、調査前の予想とだいたい一致しており、また、このテストの手びき書に記述されている普通高校生に実施した場合の簡易診断項目のチェック数の予想(チェック数3以上 11%, 2以下 89%)ともだいたい一致した。このことは、A中学校生徒の自己統制力の傾向には特別の傾向はないと考えてもよいであろう。

また、男女別にみた場合、両者の間に同じような分布の傾向がみられるが、自己統制力の不良な者は比較的、男子に多く女子に少ない。このことは、男子に非行者の多いことと関連があるのではなかろうか。

### ③ テストの判定結果と実際行動との比較

実際の非行の有無と自己統制力の状態との関連は第2表のようになり、 $\chi^2$  検定の結果、危険率0.01

以下で両者の間には関連性が認められる。

第 2 表 非行の有無と自己統制力との関連 (男女合計 実 数)

| 自己統制力の状態<br>非行の有無 | 不 良 | やや不良 | やや良好 | 良 好 | 計   |
|-------------------|-----|------|------|-----|-----|
| 有                 | 8   | 10   | 26   | 22  | 66  |
| 無                 | 1   | 15   | 53   | 248 | 317 |
| 計                 | 9   | 25   | 79   | 270 | 383 |

$$\chi^2_0 = 72.77 \quad P < 0.01 \quad df = 3$$

自己統制力が不良になるにつれて、非行者の割合が多くなるのは理論的に当然考えられることであるが、この調査では自己統制力が不良、および、やや不良と判定された者 34 名のうち、実際に非行があるのは 18 名 (52.9%) であり、16 名 (47.1%) には非行がなく、非行者と無非行者の割合に大きな差が認められなかった。

このことについて究明するために、実際に非行のある者 66 名の自己統制力の状態を分析すると、第 3 表のようになる。

第 3 表 非行者の自己統制力の状態  
数字は非行者数 ( ) 内はその割合

| 自己統制力の状態<br>性 別     | 不 良       | やや不良      | やや良好      | 良 好       | 計         |
|---------------------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|
| 男                   | 5 ( 83.3) | 8 (50.0)  | 19 (40.4) | 17 (12.1) | 49 (23.4) |
| 女                   | 3 (100.0) | 2 (22.2)  | 7 (21.9)  | 5 ( 3.9)  | 17 ( 9.8) |
| 計                   | 8 ( 88.9) | 10 (40.0) | 26 (32.9) | 22 ( 8.2) | 66 (17.2) |
| 非行者の総数に<br>対 する 割 合 | 27.3%     |           | 72.7%     |           | 100%      |

66 名の非行者のうち自己統制力が不良の者は 8 名で、不良と判定された者の総数 9 名の 88.9% であり、やや不良の者は 10 名で、やや不良と判定された者 25 名の 40% にあたる。やや良好の者は 26 名で、やや良好と判定された者の 32.9% であり、良好な者は 22 名で、良好と判定された者の総数 270 名の 8.2% であった。不良、やや不良と判定され自己統制力に問題性があると考えられる者は 18 名で、これは全非行者 66 名の 27.3% にすぎない。残りの 48 名 72.7% の自己統制力は、良好、または、やや良好で問題性は認められない。このことは非行という現実の行動は、自己統制力の不良という単一の因子だけで予測することは適当でないことを示すものと考えてよいであろう。

自己統制力の状態と非行の程度との関係を見ると第 4 表のようになる。 $\chi^2$ 検定の結果、危険率 0.05 ~ 0.025 で両者の間に有意差が認められるので、自己統制力の良好な者は不良な者に比べて、程度の重い非行をすることは少ないといえることができるであろう。

第4表 自己統制力の状態と非行程度との関係 (男女合計 実数)

| 自己統制力の状態<br>非行程度 | 不 良 | やや不良 | やや良好 | 良 好 | 計  |
|------------------|-----|------|------|-----|----|
| 重 度              | 0   | 5    | 4    | 2   | 11 |
| 中 度              | 2   | 2    | 8    | 6   | 20 |
| 軽 度              | 6   | 3    | 14   | 12  | 35 |
| 計                | 8   | 10   | 26   | 22  | 66 |

$$\chi^2_0 = 13.2 \quad 0.05 > P > 0.025 \quad df = 6$$

#### ④ このテストによる判定の限界と問題点

集団ロールシャッハ・テスト（集団用新訂人格診断検査）によって、調査対象者の自己統制力の一般の傾向を概観し、自己統制力の状態と非行の有無、および、非行の程度との関連性を調査したのであるが、このテストの限りにおいて、自己統制力の状態と非行の有無、および、非行の程度との間には、明らかに関連性がみられた。しかし、現在すでに非行がある66名のうち、自己統制力が不良または、やや不良で問題性があると考えられる者は18名（27.3%）にすぎず、残り48名（72.7%）については、自己統制力に問題性がみられなかった。このことはこの種の集団用ペーパー・テストによる自己統制力測定の限界性と、単一のテストによる非行性測定の限界性を示すものといえよう。1種類のテストだけで非行を予測することは、その予測精度は低くなり、大きな誤りを犯す危険性をもっている。

#### (2) 適応性診断テストによる判定の結果

##### ① このテストの判定基準の設定

このテストの「社会適応」の5項目は、社会的、対人的場面における個人の行動様式であり、社会に対する適応特性と呼ばれるものである。人の社会的行動は常に自己をとりまく環境をどのようにみ、自他の関係をどのように考えているかという自我認識の構造にかかっている。この自我認識の構造を牛島義友氏は環境体験と呼んでいる。このテストの手びき書では、環境体験の状態を得点50パーセントailを境界として、それ以上のものを「良好」とし、それに満たないものを「不良」としている。この研究では手びき書による判定基準を基礎とし、さらに、4分偏差を用いて上位群と下位群を選び、次の4段階に区分して判定することとした。

- 不 良 20パーセントailに満たないもの
- やや不良 20パーセントail以上50パーセントail未満のもの
- やや良好 50パーセントail以上80パーセントail未満のもの
- 良 好 80パーセントail以上のもの

##### ② テストの判定基準によって分類した環境体験の一般的傾向

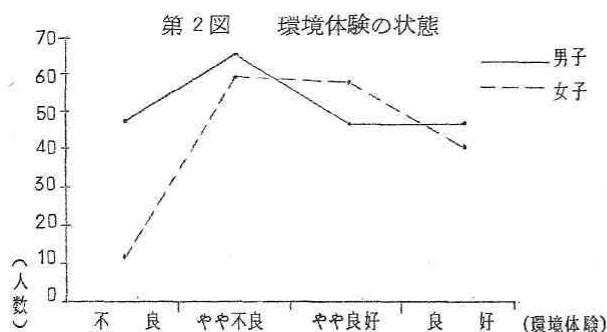
調査対象者383名の環境体験の状態の一般的傾向をみると第5表のようになる。各判定区分ごとの人数は不良と良好が比較的少なく、やや不良とやや良好が比較的多い第2図のような分布曲線をえがく。第5表の分布について  $\chi^2$  検定の結果、危険率0.01以下で有意差があった。

第5表 環境体験の一般的傾向

(実数)

| 性別 \ 環境体験の状態 | 不良   | やや不良 | やや良好 | 良好   | 計   |
|--------------|------|------|------|------|-----|
| 男            | 48   | 66   | 48   | 47   | 209 |
| 女            | 14   | 60   | 59   | 41   | 174 |
| 計            | 62   | 126  | 107  | 88   | 383 |
| 比率%          | 16.2 | 32.9 | 27.9 | 23.0 | 100 |

$$\chi^2_0 = 22.98 \quad P < 0.01 \quad df = 3$$



50パーセンタイルを境として2分した場合、環境体験の良好なグループと不良なグループの割合は男女合計では、だいたい同じであるが、不良な者は比較的男子に多く、良好な者は女子に多くみられる。環境体験が良好であるということは、環境に対し良い適応の状態にあることを示しているものであり、順応性の高い者は、環境体験が良好な状態を示しやすいといわれている。一般的にみて女子に非行者が少ないのは、女子の順応性が男子のそれよりも高いことに基因するのではなかろうか。

一般的にみて女子に非行者が少ないのは、女子の順応性が男子のそれよりも高いことに基因するのではなかろうか。

### ③ テストの判定結果と実際行動との比較

第6表 非行の有無と環境体験との関連

(男女合計 実数)

| 非行の有無 \ 環境体験の状態 | 不良 | やや不良 | やや良好 | 良好 | 計   |
|-----------------|----|------|------|----|-----|
| 有               | 33 | 24   | 5    | 4  | 66  |
| 無               | 29 | 102  | 102  | 84 | 317 |
| 計               | 62 | 126  | 107  | 88 | 383 |

$$\chi^2_0 = 76.6 \quad P < 0.01 \quad df = 3$$

環境体験の状態と非行の有無との関連をみると第6表のようになる。 $\chi^2$ 検定の結果、危険率0.01以下で両者の間に関連性があることがわかる。環境体験の状態が不良になるにつれて、非行者の割合が高くなるのは当然であるが、環境体験が不良、または、やや不良と判定された者188名のうち、実際に非行がある者は57名(30.3%)にすぎない。残りの131名(69.7%)には非行がみられなかった。このことは非行という現実の行動が生起するためには、環境体験以外の他の要因が働いていることを示すものと考えてよいであろう。

次に実際に非行のある者 66 名の環境体験の状態を分析すると第 7 表のようになる。

第 7 表 非行者の環境体験の状態 数字は非行者数 ( ) 内はその割合 (%)

| 環境体験の状態<br>性別    | 不 良       | やや不良      | やや良好     | 良 好      | 計         |
|------------------|-----------|-----------|----------|----------|-----------|
| 男                | 27 (56.2) | 14 (21.2) | 4 ( 8.3) | 4 ( 8.5) | 49 (23.4) |
| 女                | 6 (4.29)  | 10 (16.7) | 1 ( 1.7) | 0 ( 0 )  | 17 ( 9.8) |
| 計                | 33 (53.2) | 24 (19.1) | 5 ( 4.7) | 4 ( 4.5) | 66 (17.2) |
| 非行者の総数に<br>対する割合 | 86.4%     |           | 13.6%    |          | 100%      |

非行者総数 66 名のうち、57 名 (86.4%) は環境体験が不良、または、やや不良であり、残りの 9 名 (13.6%) が良好、または、やや良好であった。この調査においては非行者の実際の行動と環境体験の状態は、だいたい一致しており、66 名の生徒の非行の生起には、環境的要因が、より大きく影響していると考えられるであろう。

環境体験の状態と非行の程度との関係を見ると第 8 表のようになる。 $\chi^2$ 検定の結果、両者の間には統計的な有意差は認められないので、関連性はないというのである。非行の程度は単に環境体験だけでなく、複雑な要因によってきまるものであることは、自己統制力の場合と同じといえよう。

第 8 表 環境体験の状態と非行程度との関係 (男女合計 実 数)

| 環境体験の状態<br>非行程度 | 不 良 | やや不良 | やや良好 | 良 好 | 計  |
|-----------------|-----|------|------|-----|----|
| 重 度             | 4   | 4    | 2    | 1   | 11 |
| 中 度             | 12  | 6    | 1    | 1   | 20 |
| 軽 度             | 18  | 14   | 2    | 1   | 35 |
| 計               | 34  | 24   | 5    | 3   | 66 |

$$\chi^2_0 = 7.92 \quad 0.30 > P > 0.20 \quad df = 6$$

#### ④ このテストの判定の限界と問題点

適応性診断テストの「社会適応」の 5 項目によって、調査対象者の環境体験の一般的傾向を調べ、環境体験の状態と非行の有無、および、非行の程度との関連性を考察したのであるが、このテストにおいては調査対象者 383 名のうち、環境体験が不良、または、やや不良の者は 188 名であり、そのうち非行のある者は 57 名 (30.3%) にすぎない。ところが、実際に非行のある 66 名についてみると、その 86.4% にあたる 57 名は環境体験が不良であった。このことから現実には非行のある者の環境体験には問題性があるが、環境体験に問題性があっても、必ずしも、非行に陥るとは限らないといえることができるであろう。すなわち、現実には非行が生起するには環境体験以外の要因も働いていることを示して

いるものといえよう。このことは自己統制力の場合と同じく、この種の集団用ペーパー・テストによる環境体験測定の限界性と、単一テストによる非行性測定の限界性を示すものと考えられる。ここでも1種類のテストによる非行の予測は、大きな危険を伴うことがうかがえる。

2 自己統制力と環境体験の状態とによる非行の予測

(1) 非行性識別基準の設定

個人の有する非行性は具体的には、自己統制力と環境体験の状態とによって、は握することが可能であることは、Ⅱの2 (2)の②「潜在的な非行性と非行の予測」の項において論述したが、非行に関する理論的研究と第1年次の調査結果、および、本年次の各単一テストの結果の考察等から、自己統制力と環境体験の二つの因子を組み合わせて、非行予測のため次のような非行性識別基準を作成した。この基準は各構成因子と非行との関連性の度合いによって、重みをつける加重失点方式によるか、重みをつけない単純失点方式によるべきか解明する余裕がなかったため、本研究では各因子に重みづけをしないで、表頭と表側にそれぞれ自己統制力と環境体験の各因子を配列し、16のカテゴリーによる識別基準表を作成した。さらに、これを実用的な見地から次の四つのカテゴリーに集約してこの調査に使用した。

| 自己統制力 \ 環境体験 | 良 好 | やや良好 | やや不良 | 不 良   |
|--------------|-----|------|------|-------|
| 良 好          |     |      |      |       |
| やや良好         |     |      |      | ※     |
| やや不良         |     |      | ※    | ※ ※   |
| 不 良          |     | ※    | ※ ※  | ※ ※ ※ |

のわく内に含まれる各カテゴリーに属する者は、自己統制力・環境体験の両因子ともに不良か、やや不良の場合が多く、非行の危険性の高いグループである。このうち※※※の場合は両因子ともに不良であり、非行の危険性がきわめて高いと考えられるグループである。※※の場合は1因子が不良であれば、他の1因子はやや不良であり、非行の危険性は高いと考えられるグループである。※の場合は1因子が不良であれば、他の1因子はやや良好であるか、あるいは、両因子ともにやや不良であって、非行の危険性はかなり高いと考えられるグループである。しかし実際には※※※と※※とは非行者と無非行者の割合に、ほとんど差がみられないので次のようにまとめても実的には支障がないものとする。

- ※※※と※※とを合わせて — 「非行の危険性が高い」
- ※ — 「非行の危険性が、かなり高い」

のわく内に含まれる各カテゴリーに属する者は、1因子が不良であれば、他の1因子は良好であり、1因子がやや不良であれば、他の1因子はやや良好であって、非行の危険性については、このテストだけでは判定困難と考えられるグループである。したがって、このカテゴリーに属する者は — 「非行の危険性は断定できない」として判定を保留する。

のわく内に含まれる各カテゴリーに属する者は、両因子ともに良好か、やや良好であり、あるいは、1因子が良好であって、他の1因子はやや不良という組み合わせであり、非行の危

危険性は低いと考えられるグループである。このグループに属する者については、非行予測の実用上、さらに分ける必要がないので一括して — 「非行の危険性は少ない」と判定する。

## (2) 非行性識別基準による分類

調査対象者 383 名を前述の非行性識別基準によって分類し、その分布の状態をみると第 9 表のようになる。

第 9 表 非行性識別基準による分類

(実 数) ( ) 内は非行者数の再掲

| 環境体験<br>自己統制力 | 良 好      | やや良好      | やや不良     | 不 良     | 計        |
|---------------|----------|-----------|----------|---------|----------|
| 良 好           | 65 ( 2 ) | 84 ( 1 )  | 79 ( 2 ) | 42 (17) | 270 (22) |
| やや良好          | 16 ( 0 ) | 18 ( 1 )  | 30 (12)  | 15 (13) | 79 (26)  |
| やや不良          | 6 ( 0 )  | 4 ( 2 )   | 13 ( 7 ) | 2 ( 1 ) | 25 (10)  |
| 不 良           | 1 ( 1 )  | 1 ( 1 )   | 4 ( 4 )  | 3 ( 2 ) | 9 ( 8 )  |
| 計             | 88 ( 3 ) | 107 ( 5 ) | 126 (25) | 62 (33) | 383 (66) |

各カテゴリーごとの非行者と無非行者の割合は、次のようになっている。

□ のわく内に含まれる各カテゴリーに属する者の非行者の割合は高く、一つの例外を除けば、だいたい 70 % 以上となっている。

□ のわく内に含まれる各カテゴリーに属する者の非行者と無非行者の割合は、あまり大きな差はみられず、非行者は一つの例外を除けば、40 % ~ 50 % 程度である。

□ のわく内に含まれるカテゴリーに属する者の非行者の割合は、明らかに低くなっており、だいたい 2 ~ 3 % 程度である。

## (3) 非行性識別基準による非行の予測と実際行動との関連についての考察

非行性識別基準による判定結果と調査対象者の実際行動とを比較し、テストによる予測の適中率を検討すると次のようになる。(第 9 表参照)

□ のわく内に含まれる各カテゴリーに属する者、すなわち、非行の危険性が高い、あるいは、かなり高いと判定された者は、総数 38 名であるが、このうち 28 名 (76.7 %) は実際に非行があり、10 名 (23.3 %) は非行がみられなかった。 $\chi^2$ 検定の結果、危険率 0.01 以下で有意差があり、非行の危険性が高い、あるいは、かなり高いと判定された者は明らかに非行者が多くなっている。

□ のわく内に含まれる各カテゴリーに属する者、すなわち、非行の危険性は断定できないとして判定を保留された者は、総数 77 名であるが、このうち 32 名 (41.6 %) は非行があり、45 名 (58.4 %) には非行がみられなかった。非行者と無非行者の割合は接近している。 $\chi^2$



検定の結果、有意差は認められなかった。

のわく内に含まれる各カテゴリーに属する者、すなわち、非行の危険性は少ないと判定された者は総数 268 名であるが、このうち 6 名 (2.2%) は非行があり、262 名 (97.8%) には非行がみられなかった。 $\chi^2$ 検定の結果、危険率 0.01 以下で有意差があり、非行の危険性は少ないと判定された者は明らかに非行者は少なくなっている。

以上の判定結果を一覧表にまとめると第 10 表のようになる。この表の分布について  $\chi^2$ 検定をすると危険率 0.01 以下で、テストによる予測結果と実際行動との間には関連性が認められるので、この識別基準による判定は、非行者と無非行者、および、そのいずれとも断定できない者を区別していると考えてもよいであろう。

第 10 表                      テストによる非行の予測と実際行動との関連 (実 数)

| テストによる予測<br>実際行動 | 非行の危険性が<br>高い | 非行の危険性が<br>かなり高い | 非行の危険性は<br>断定できない | 非行の危険性は<br>少ない | 計   |
|------------------|---------------|------------------|-------------------|----------------|-----|
| 非 行   あり         | 7             | 21               | 32                | 6              | 66  |
| 非 行   なし         | 2             | 8                | 45                | 262            | 317 |
| 計                | 9             | 29               | 77                | 268            | 383 |

$$\chi^2_0 = 19.15 \quad P < 0.01 \quad df = 3$$

さらに、これを各判定別に検討してみると次のようになる。

- a 非行の危険性が高いと予測された者は総数 9 名であるが、このうち実際に非行のある者は 7 名で予測の適中率は 77.8% であり、調査時点においては非行がなく、この予測が適中しなかった者は 2 名で、その率は 22.2% であった。 $\chi^2$ 検定の結果は  $0.10 > P > 0.05$  で有意差があった。
  - b 非行の危険性がかなり高いと予測された者は総数 29 名であるが、このうち実際に非行のある者は 21 名で、予測の適中率は 72.4% であり、調査時点においては非行がなく、この予測が適中しなかった者は 8 名、27.6% であった。 $\chi^2$ 検定の結果は  $0.02 > P > 0.01$  で有意差が認められた。
- a と b を合わせ非行の危険性があると予測された者は総数 38 名であるが、実際に非行のある者は 28 名で予測の適中率は 73.8% であり、非行のない者は 10 名で、その率は 26.2% であった。これについて  $\chi^2$ 検定の結果は  $P < 0.01$  で有意差が認められ、予測と実際行動の間には関連性があるといえることができる。
- c 非行の危険性は断定できないとして予測を保留した者は総数 77 名であるが、このうち 32 名 (41.6%) には非行があり、45 名 (58.4%) には非行がなかった。 $\chi^2$ 検定の結果は  $0.20 > P > 0.10$  で有意差は認められなかった。
  - d 非行の危険性が少ないと予測された者は総数 268 名であるが、このうち 262 名は予測どおり非行がなく、予測の適中率は 97.8% であり、予測に反して非行のある者はわずかに 6 名で、その率は 2.2% にすぎない。 $\chi^2$ 検定の結果は  $P < 0.01$  で有意差が認められ、予測と実際行動の間には関連性があるといえることができる。

次に実際に非行のある66名について、どのように予測しているかを検討すると第11表のようになる。

第11表 非行程度の予測

| 予測の結果<br>非行の程度 | 非行の危険性が<br>高い | 非行の危険性が<br>かなり高い | 非行の危険性は<br>断定できない | 非行の危険性が<br>少ない | 計    |
|----------------|---------------|------------------|-------------------|----------------|------|
| 軽 度            | 4             | 11               | 18                | 2              | 35   |
| 中 度            | 2             | 6                | 9                 | 3              | 20   |
| 重 度            | 1             | 4                | 5                 | 1              | 11   |
| 計              | 7             | 21               | 32                | 6              | 66   |
| 比 率            | 42.4%         |                  | 48.5%             | 9.1%           | 100% |

$$\chi^2_0 = 2.64 \quad 0.90 > P > 0.95 \quad df = 6$$

$\chi^2$ 検定の結果、有意差はなく予測と実際の非行程度との間には関連性は認められないので、この識別基準によって非行の程度まで判断することは無理であろうし、実用上その必要はない。66名の非行者を各判定区分ごとに検討すると次のようになる。

- 非行の危険性が高い、および、かなり高いと予測された者は合計28名で、全非行者66名の42.4%を正しく識別している。
- 非行の危険性は断定できないとして判定を保留した者は32名で、全非行者の48.5%であり、約半数の非行者については予測ができなかった。
- 非行の危険性は少ないと予測された者は6名で、全非行者66名の9.1%を誤って識別している。

以上の調査結果を総合すると次のようになる。このテスト法による非行の予測は、現在の非行については、非行の危険性が高い、あるいは、かなり高いと判定した場合には72%ないし78%の確率で適中しており、非行の危険性は少ないと判定した場合には98%の高い確率で適中している。

また、非行者66名についての予測結果は、その42%を正しく非行者として識別している。

以上の2点から考えて、このテスト法による非行の予測は、現在の非行者の識別に用いた場合、その40%程度を確率70%以上で識別することが可能であるといえよう。

#### (4) EIPCテストによる非行の予測結果との比較

本研究におけるテスト法の非行予測の信頼性を検討するために、EIPCテストによる非行の予測結果との比較を試みた。EIPCテストによる非行の予測は、その判定基準に従って、非行傾向型(D型)、準非行傾向型(D'型)、および、非行傾向なし(A型、P型)の3類型に分類して行なった。予測結果と実際の非行の有無との関連は第12表のようになる。この分布について $\chi^2$ 検定の結果、危険率0.01以下で有意差が認められるので、予測結果と実際の行動の間には関連性があるといえることができる。

第12表 EIPCテストによる非行の予測と実際行動との関連  
(実数)

| EIPCテストによる予測<br>実際行動 | 非行傾向型<br>(D型) | 準非行傾向型<br>(D型) | 非行傾向なし<br>(A型P型) | 計   |
|----------------------|---------------|----------------|------------------|-----|
| 非行あり                 | 15            | 11             | 39               | 65  |
| 非行なし                 | 16            | 15             | 279              | 310 |
| 計                    | 31            | 26             | 318              | 375 |

$$\chi^2_0 = 363.75 \quad P < 0.01 \quad df = 2$$

これを各判定別に検討してみると次のようになる。

- a 非行傾向型 (D型) と予測された者は総数31名であるが、このうち実際に非行のある者は15名で予測の適中率は48.4%であり、調査時点において非行がなく、この予測が適中しなかった者は16名でその率は51.6%であった。 $\chi^2$ 検定の結果は $0.90 > P > 0.80$ で有意差は認められなかった。
- b 準非行傾向型 (D'型) と予測された者は総数26名であるが、このうち実際に非行のある者は11名で予測の適中率は42.3%であり、調査時点において非行がなく、この予測が適中しなかった者は15名で、その率は57.7%であった。 $\chi^2$ 検定の結果は $0.50 > P > 0.30$ で有意差は認められなかった。
- c 非行傾向なしと判定された者は総数318名であるが、このうち279名は予測どおり非行がなく、予測の適中率は87.7%であり、予測に反して非行のある者は39名でその率は12.3%であった。 $\chi^2$ 検定の結果は $P < 0.01$ で有意差が認められ、予測と実際行動の間には関連性があるといえることができる。

EIPCテストで非行傾向型、および、準非行傾向型と予測された者は総数57名であるが、このうち実際に非行がある者は26名で45.6%が適中している。これについての $\chi^2$ 検定の結果は $0.90 > P > 0.80$ で有意差は認められなかったが、この調査では、だいたい45%の確率で非行者を識別している。

次に実際に非行のある者65名に対して、EIPCテストではどのように予測しているかを検討すると第13表のようになる。

第13表 EIPCテストによる非行程度の予測  
(実数)

| 予測の結果<br>非行の程度 | 非行傾向型<br>(D型) | 準非行傾向型<br>(D'型) | 非行傾向なし<br>(A型P型) | 計    |
|----------------|---------------|-----------------|------------------|------|
| 軽度             | 4             | 8               | 22               | 34   |
| 中度             | 4             | 4               | 12               | 20   |
| 重度             | 4             | 2               | 5                | 11   |
| 計              | 12            | 14              | 39               | 65   |
| 比率             | 40.0%         |                 | 60.0%            | 100% |

$$\chi^2_0 = 3.25$$

$$0.70 > P > 0.50$$

$$df = 4$$

$\chi^2$ 検定の結果、有意差は認められないのでEIPCテストによって、非行の程度まで識別することは無理であろう。65名の非行者を各判定区分ごとに検討してみると次のようになる。

- a 非行傾向型、および、準非行傾向型と予測された者は合計26名で、全非行者65名の40.0%を正しく識別している。
- b 非行傾向なしと予測された者は39名で、全非行者の60.0%を誤って識別している。

第12表と第13表の調査結果を総合すると次のようになる。EIPCテストを用いた非行の予測は、現在の非行者の識別に用いた場合、その40%程度を確率45%程度で識別することが可能であるといえよう。

本研究におけるテスト法とEIPCテストによる非行者の識別力について比較すると、両方法ともに調査時点において非行のある者の40%程度を選び出しているが、その際、無非行者を誤って選び出す確率は、本研究におけるテスト法では30%程度であるのに対し、EIPCテストでは55%程度であり、この調査の限り、本研究によるテスト法の予測力は、EIPCテストのそれよりかなり高くなっている。このようにすでに標準化され、多数の学校等で非行の予測のために実用に供されているEIPCテストよりも予測力が高いということは、本テスト法が実用上、信頼できることを示しているものである。

#### (5) 将来に向かっての追跡調査による予測性の検討

実用性を検討するためには、調査時点における実際の非行の識別という回顧的検定だけでは、じゅうぶんではない。予測テストの実用的価値は、現在の非行よりも将来の非行を高い確率をもって予測することができるかどうかということである。このために、本研究では調査時点から将来に向かって、全調査対象者383名の行動について追跡調査を開始した。この追跡調査によって、将来、発生する非行を適確には握し、本テスト法の予測の適中率を展望的に検定しようとするものである。追跡調査の具体的計画としては、実際の行動調査は各学級担任教師があたり、全調査対象者に対し綿密な観察や調査を行ない、家庭や関係機関からの情報や資料を集めて記録しておき、調査者が3か月ごとに集計整理して予測結果と照合して検討するものである。

第1回の集計整理は昭和40年12月に行なった。その結果、昭和40年9月から12月までの3か月間に、5名の男子生徒が万引等の犯罪行為によって警察の補導を受けていたことが判明した。この5名の生徒に対する教師の予測、EIPCテストによる予測結果、および、本研究によるテスト法の予測結果を比較対照すると第14表のようになる。

学級担任教師の行動観察による予測では、5名のうち4名までを非行の危険性があると判定し、EIPCテストでは、1名を非行傾向型、1名を準非行傾向型とし、3名を非行傾向なしと判定している。本研究のテスト法では、3名を非行の危険性がかなり高いとし、2名を非行の危険性は断定できないとしているが、非行の危険性は少ないと判定した者は1名もない。以上の3種の予測の結果を比較すると、数値的には教師の行動観察による予測が最も精度が高く、本研究によるテスト法がこれにつぎ、EIPC

Cテストの予測が最も低くなっている。

第 14 表      新規非行者に対する予測結果の比較

| 教師の予測     | 人数 | EIPCテストによる予測 | 人数 | 本テスト法による予測    | 人数 |
|-----------|----|--------------|----|---------------|----|
| 非行の危険性がある | 4  | 非行傾向型        | 1  | 非行の危険性が高い     | 0  |
| 非行の危険性はない | 1  | 準非行傾向型       | 1  | 非行の危険性がかなり高い  | 3  |
|           |    | 非行傾向なし       | 3  | 非行の危険性は断定できない | 2  |
|           |    |              |    | 非行の危険性は少ない    | 0  |
| 計         | 5  | 計            | 5  | 計             | 5  |

次に 5 名の非行生徒の個々について、3 種の予測法による予測結果を一覧表にすると第 15 表のようになる。

第 15 表      新規非行者個々に対する予測結果の一覧

| 非行生徒番号         | 従来の非行の有無 | 予測結果 | 教師の予測     | EIPCテストによる予測 | 本テスト法による予測        |
|----------------|----------|------|-----------|--------------|-------------------|
| P <sub>1</sub> | 中度の非行あり  |      | 非行の危険性がある | 非行傾向型        | 非行の危険性については断定できない |
| P <sub>2</sub> | 同 上      |      | 同 上       | 非行傾向なし       | 非行の危険性はかなり高い      |
| P <sub>3</sub> | 同 上      |      | 同 上       | 同 上          | 同 上               |
| P <sub>4</sub> | 非行なし     |      | 非行の危険性はない | 同 上          | 同 上               |
| P <sub>5</sub> | 中度の非行あり  |      | 非行の危険性がある | 準非行傾向型       | 非行の危険性については断定できない |

P<sub>1</sub>、P<sub>2</sub>、P<sub>3</sub>、P<sub>5</sub>の 4 生徒は、過去においてすでに中度の非行があり、学校では非行生徒としてチェックしていたものであって、学級担任教師が非行の危険性があると判定したのは当然であろう。P<sub>4</sub>については、過去において非行は全く見られず、態度・行動等にも問題性がなかったので、学級担任教師が非行の危険性はないと判定したものであって、行動観察による非行予測の限界を示すものであろう。

EIPCテストでは、P<sub>4</sub>については非行傾向なしと判定しているが、本研究のテスト法では非行の危険性がかなり高いと判定し、将来の非行の危険性を明らかに予測している。非行の早期予測法は、経験や直感などによっては予見することのできない潜在的非行性の保有者を、現実非行が発生する前に予知するところに、その本来の意義がある。教師の行動評価による予測や他のテストで予測できなかった P<sub>4</sub>に対する予測の適中は、このテスト法による予測の信頼性を示す一つの例であろう。

P<sub>2</sub>、P<sub>3</sub>については、すでに過去に中度の非行があり、学級担任教師が非行の危険性があると判定したのは当然であろう。EIPCテストでは、これを非行傾向なしとしているが、本研究のテスト法では、非行の危険性はかなり高いと正しく予測している。

P<sub>1</sub>、P<sub>5</sub>については、すでに過去に中度の非行があり、学級担任教師は非行の危険性があるとし、EIPCテストでも、それぞれ、非行傾向型、準非行傾向型と正しく予測しているが、本研究のテスト法では、非行の危険性については断定できないとして判定を保留しているところに、今後さらに研究すべき

問題を残している。しかしながら、5名の新規非行生徒に対し、本研究のテスト法では、非行の危険性が少ないと誤って判定した者が1名もなかったことは、 $R_4$ に対する予測の適中とともに、このテスト法の実用性を示すものといつてよいであろう。

次に全調査対象者383名に対する非行者の比率17.3%と、追跡調査開始後、新たに非行をした5名の生徒に対する本テスト法の予測率60.0%について、母比率と標本比率の差を臨界比(Critical Ratio C.R.)検定をすると両者の間には、危険率0.006以下で有意差があり、このテストの予測の正当性を示している。そして、これはEIPCテストによる予測率40.0%と母比率17.3%との差のC.R.検定結果の危険率0.08以下より有意性が高くなっている。

将来の非行に対する予測の展望的検定においては、追跡開始後3か月で5名の新規非行者のうち3名を正しく予測し得たこと、および、教師の行動観察でも、EIPCテストでも予測し得なかった、あるひとりの生徒の非行の危険性を事前に予測した本研究のテスト法は、非行の早期予測に有効であり、非行予測テストとして実用に耐えうるものと考えている。もちろん、この比較研究は期間も短かく、対象者数も少ないので、このテスト法の予測精度が明らかに高いと断定することはできないが、この調査の限り教師の観察やEIPCテストよりも予測精度がすぐれていたことは事実である。

## お わ り に

本年次の研究目的である集団ロールシャッハ・テストと適応性診断テストを用いた非行予測法の実用性の検討を、テストの判定結果と実際行動との関連性の調査、EIPCテストによる予測成績との比較、追跡調査による将来の非行と予測結果との比較という三つの面から実施したのであるが、今までの調査結果では、一応、実用性があるといつてもよいであろう。このテスト法ではテストの実施、および、その整理が容易であつて、専門的な知識・技術を必要としない上に、時間的、労力的、経済的にも負担が少ないので、学校で多数の一般児童・生徒の中から潜在的な非行性を有する者を、すそ払い的に選別するのに用いることは可能であり、かつ、その効果も期待することができるであろうと考えている。

しかし、このテスト法による非行予測には、まだ多くの研究を要する問題を含んでいる。その第1は多数の非行要因の中から、人格面における自己統制力と社会的環境面における環境体験という、わずか2個の因子によって、はたして、人間の複雑な精神活動の所産である非行を適確に予測できるかどうかという、予測因子の選択に関する問題であり、その第2は、この研究で用いた2種類のテストが、非行の予測に最少限度の必要因子と考えている自己統制力と環境体験の状態を、はたして、適確に測定しているかというテスト構成の問題である。

この二つの問題は、本研究の最も基本的な命題であり、それが明らかにされなければ、このテスト法による非行予測法の学問的価値は認められないことになるであろうが、非行予測法それ自体が未解決の多くの問題を内包している新しい研究領域であるので、この問題の解決は、今後における専門家の研究にまたなければならないであろう。

第3の問題点は本研究においては、調査対象者も少なく、調査法や検定法も厳密な手続きによって行



なわれてはいないということであり、第4の問題点は、この予測法の予測率が必ずしも、高くないということである。しかし、100%の非行の予測は現在のところ不可能であり、他の非行予測法でもだいたい同じような予測精度であるので、このことは、このテスト法の致命的な問題とはならないであろう。

以上のように多くの問題はあるにしても、この2種の集団テストが児童・生徒の非行性の識別に有力な資料を提供するものであることを臨床的に経験している。この臨床的经验を基礎として、これに基づく発想を組織的、計画的に体系づけて諸種の調査を実施したのであるが、その分析考察の結果から児童・生徒の有する非行の危険性は、ある程度、予測できるという肯定的見通しをもつに至った。

われわれは長い間、経験や直感によって児童・生徒の非行性を判断し、将来の非行を予測するという非科学的方法にたよっていた。このような方法も、あながち、捨て去るべきものではなく、その方が、むしろ、適中率が高いと反論する者もあるかも知れないが、それはあくまで名人芸ともいうべきものであって、一般の学校の教師に望むことはできない。科学的、客観的な技法を非行予測の分野に取り入れ、さらに集団的方法の導入によって、だれでも容易に非行の予測ができるということは、児童・生徒の非行防止対策の推進のために意義あることと信じている。

ところで、このような客観的集団テストによる非行予測法の使用には、おのずから限界がある。その限界を越えての使用は乱用であり、多くの弊害を伴うことを忘れてはならない。非行予測法の限界とは第1に予測法それ自体のもつ限界であり、これについて樋口幸吉氏は、その著「グリュック犯罪予測法入門」に“非行予測法それ自体が、あくまで試行の域を出ないものであって、一つの調査研究において有効であったからといって、実際場面に運用するには、なお、多くの問題が残されている。いくつかの因子が実験的に有効であっても、他のすべての因子を排除することはできないであろうし、これらの方法が、いかに客観的、実証的であっても数理統計上の蓋然性に基礎をおくものである限り、生きた人間に機械的にあてはめることは、きわめて危険である。このような予測法は非行者の総合判断にとって、客観的な一つの補助手段であることを忘れてはならない。”と述べているが、心に銘じておくべきことばであろう。

第2には予測に使用するテストの適用範囲から生ずる限界である。集団ロールシャッハ・テストではその適用範囲を中学校1年以上としており、適応性診断テストでは小学校5年ないし中学校3年としている。したがって、この両テストを用いた非行予測法の適用範囲は中学校1年ないし3年ということになり、それ以外の者に適用しても予測効果は期待できないであろう。

この研究は3か年計画で開始した研究であり、明年度をもって一応、終了する予定であるが、明年度はこの非行予測法を実地に適用し、潜在的な非行性を有する者として識別された者に対し、詳細な資料を集めて臨床的に診断し、はたして、非行性があるかどうか、もし、あるとすれば、その非行性はどのような過程を経て形成されたものであるかを分析的に調査するとともに、潜在的な非行性を有する者に対する効果的な指導法を実践的に究明し、かつ、それを生徒指導の中でどのように具体化し、どのように位置づけたらよいかを考察し、3か年研究のまとめとしたいと考えている。



終わりに、この研究についての各位のご批判をお願いするとともに、この研究調査に対し、終始、積極的にご協力をいただいた研究協力校の校長先生はじめ諸先生に対し、深く感謝の意を表するものである。この研究を担当し、執筆したのは 東山修二 である。

# 参 考 文 献

- |                |   |                        |
|----------------|---|------------------------|
| 牛島義友 他         | 講座家庭と学校第 5 卷<br>問題児と非行少年                | 金子書房                   |
| 水島恵一           | 非行臨床心理学                                 | 新書館                    |
| 上武正二 他         | 非行生徒の心理と指導                              | 新光閣                    |
| 牛島義友           | 不良化傾向の早期発見                              | 金子書房                   |
| 小川太郎 他         | 少年非行と少年保護                               | 立花書房                   |
| 岩井弘融           | 犯罪社会学                                   | 弘文堂                    |
| 池見 猛           | 犯罪心理学                                   | 文久書林                   |
| 山根清道           | 犯罪心理学                                   | 共立出版                   |
| 吉益脩夫           | 犯罪心理学                                   | 東洋書館                   |
| 磯村英一           | 社会病理学                                   | 有斐閣                    |
| 村田宏雄           | 青少年犯罪の社会心理                              | 刀江書院                   |
| グリュック, S. & E. | 少年非行の解明                                 | 法務省                    |
| 館沢徳弘           | 少年非行の予測                                 | 一粒社                    |
| 安倍治夫 他         | 犯罪予測法入門                                 | 一粒社                    |
| 「法律のひろば」編集部    | 犯罪予測の理論と実際                              | 帝国地方行政学会               |
| 警 察 庁          | 非行危険性判定法                                | 立花書房                   |
| 戸川行男 他         | 性格心理学講座第 4 卷<br>性格の異常と指導                | 金子書房                   |
| 坂本一郎 他         | 講座教育診断法第 5 卷                            | 牧書店                    |
| 内山喜久雄          | 問題児臨床心理学                                | 金子書房                   |
| 山口 透           | 少年非行への挑戦                                | 黎明書房                   |
| 檜山四郎           | 非行中学生の対策と指導                             | 酒井書店                   |
| 井坂行男           | 非行の予測と指導                                | 文教書院                   |
| 井坂行男 他         | 問題行動の早期発見                               | 文教書院                   |
| 本明 寛           | 臨床的精神診断法解説                              | 金子書房                   |
| 遠藤辰男           | 非行の予見について                               | 児童心理第 14 卷第 10 号       |
| 遠藤辰男           | 非行予測の問題点                                | 児童心理第 17 卷第 2 号        |
| 山本晴雄           | 少年非行の低年齢化の問題と学校教育                       | 児童心理第 17 卷第 2 号        |
| 三宅守一           | 非行の芽とその処置                               | 児童心理第 17 卷第 12 号       |
| 樋口幸吉           | 非行原因論                                   | 児童心理第 17 卷第 11 号第 12 号 |
| 水島恵一           | 非行児の価値観                                 | 児童心理第 19 卷第 2 号        |
| 中央青少年問題協議会     | 青少年白書 1.9 64                            |                        |
| 新潟県警察本部        | 犯罪統計書昭和 39 年度                           |                        |
| 新潟県立教育研究所      | 研究紀要第 46 集<br>問題生徒の理解と指導に関する研究          |                        |
| 新潟県立教育研究所      | 研究紀要第 50 集<br>学校における児童・生徒の非行防止対策の研究 (I) |                        |